



師を語る

日本のアラビアン・ナイト断章

板 垣 雄 三

学部・大学院で西洋史を専攻，東大東洋文化研究所，東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所，東大教養学部などに勤務，研究所で人文地理学，アラビア部門，西アジア経済政治などに所属，学部・大学院で歴史学，国際関係論，イスラム学，地域研究（アジア研究）を担当，現在はコミュニケーション学部で働く私にとって，わが「師」と感じる人はあまりにも多い。その中から，おのずと心に浮かぶ3人の「師」について語ろう。

私は，新制東大駒場での江口朴郎先生（1911～89）の「西洋史」の最初の講義や演習に列席した。ボソボソとしゃべる江口先生の話はよく分からぬというのが定評。だが，それにしては，その後，江口朴郎という人の学問的影響と感化はあまりに広く及んでいる。偉大な教師は教師らしからず，説かれたことは，結局は以下に尽きる。借り物の理論・学説・教条の適用にたけた「優等生」は破産する。抽象的原則からではなく，事実から出発して考えよ。現実はずねに混沌としているが，混沌は変化し発展する。世界を構造的に見抜く知恵，最大多数の最大幸福の保証として人びとの協力の知恵は増大している。……

のちに輸入される「世界システム論」の着想は，はるかに早く江口が先取りしていた。

明治国家を評価する歴史家，江口の眼力は，のちに作家，司馬遼太郎が描き出す明治国家像をも透過するものだった。江口は東大教養学科の新設に際し，国際関係論という新しい学際領域の組織者・育成者であった。「あとは若い諸君の責任！」と言い残し，蛇のごとく聡き楽観主義者のまま，昭和を看取り，ベルリンの壁崩壊の前に世を去られた。歴史家として死期を選ばれたのか？とさえ疑う。

江口朴郎，林健太郎（西洋史学科での私の指導教官），高橋幸八郎先生の共著（卒論の集成）『国際関係の史的分析』（1949年）の関心対象は，実は中東。江口先生には，第2次大戦中『回教圏』誌に発表の「サイクス・ピコ秘密協定」という論文もある。学部卒ホヤホヤの私に，江口先生は東方問題関係条約集の翻訳・解説の仕事を任された。1950年代前半に，私はこうして中東研究者となる。1979年リビアでの会議にご一緒したとき，トリポリのホテルのバルコンで私が仕掛ける議論を夜風にかわし，先生は「今宵はアラビアン・ナイトだね」と笑われた。晩年の先生の口癖は，「リビアをみる目でその人の世界に対する取り組み方が分かる」であった。

日本の大学でも中東・イスラーム研究の態勢整備は不可欠という確信から，東大東洋文



化研究所は私にそこで研究に従事するチャンスを与えてくれた。1960年、飯塚浩二先生(1906~70)のもとで私は助手となる。当時、同研究所では、所員が弁当を持ち寄り昼食を共にしつつ雑談する習慣があった。それは国の内外を問わずこれまで私が経験した研究生生活の中でもっとも充実した時間だった。白熱の研究会もさることながら、こうして日常的に、飯塚先生のみならず仁井田陞、江上波夫、福島正夫、石田英一郎、山本達郎、川野重任、丸山真男等々諸先生の自在の多角的談論に触れた豊饒の時を忘れることはできない。人文地理学者、飯塚浩二は1930年代ソルボンヌに留学、地理学に経済史的・比較文明論的視野をうちたてた。その飯塚先生は自他共に許すヨーロッパ通で、日本の知識人がヨーロッパ、ヨーロッパと言いつつ、ヨーロッパがいかにか分かっていないかを慨嘆されるのだった。東大自体〈東洋文化〉研究所をもつごとく西洋人の物まねをする癖に、ヨーロッパ・オリエンタリズムの大宗たる中東・イスラーム研究はなおざりにしてきた歪みを、日本および日本の学術の針路の問題として憂えておられた。飯塚先生の支持と激励のおかげで、私はのびのびと勉強に励むことができた。ご自身、イスラーム世界の鉄砲や天文観測儀に夢中になり、モノを見る眼が大事と説教しておられたのに、先生は晩年すっかり『アラビアン・

ナイト』の虜になり、それを経済史の史料として読むのだ、と繰り返された。

前嶋信次先生(1903~83)には、私は、慶応義塾大学の教室などで「おそわる」場面をついに逸してしまった。前嶋先生は、1950年代半ばにお目にかかった最初から、私を研究者仲間として遇してくださったからである。だが、アラブ・イスラーム研究の分野で私の実質的な師は前嶋先生だった(私が取り組んだ仕事の先駆者はかつて回教圏研究所にあった野原四郎先生だが、敗戦を境に中国研究へと転進されていた)。研究会で、研究プロジェクト運営の打合せで、くつろいだご自宅でのよもやま話の中で、前嶋先生は謙虚に丁寧に指導してくださった。東洋史学者、前嶋信次は、欧米イスラーム学への深い造詣を背景に、日本だからこそ可能なイスラーム研究の地平を開拓した。『アラビアン・ナイト』のアラビア語原典訳はその発露である。前嶋はイスラーム世界の人間と文化への敬愛を教えつつ、日本の中東・イスラーム研究者の親和と協同の雰囲気醸成した。信州高ボッチでの野性的合宿で、花咲き乱れる原野を若い研究者の群れと楽しげに歩まれた先生の姿は、今なお鮮やかにまぶたに浮かぶ。

いたがき・ゆうぞう(1931年生)
東京経済大学教授、東京大学名誉教授。

